

アンコール小児病院(AHC)から最後の“今月の出来事 ー自立式典スペシャル”

多くの支援者の皆様へ病院で日々起きていることをお知らせしたいと2005年から始まったこの“今月の出来事”も、今年で8年目となりました。そして、このお知らせをすることを、いつかいつかと心待ちにしておりました。その“お知らせ”とは“アンコール小児病院の自立”です。今回はこの“AHC 自立スペシャル版”とさせていただきます。まずは、AHC のこれまでをちょっと振り返ってみましょう。



政府から提供された土地に AHC の建設が開始されました。



開院当初のスタッフはたったこれだけ。



あっという間にこんなにたくさんの仲間が！



初めての患者さんを迎えてドキドキ…



人工呼吸器もなく、24 時間交代でアンビューバッグで空気を送り込んでいたのが懐かしいです。



入院病棟が開設されるなど、日々、新たなチャレンジがいっぱいでした。



毎日勉強の日々を繰り返して、知識と経験を積み重ねてきました。



手術もたくさんこなし、2010 年にはカンボジア人スタッフだけで
心臓の手術を初めて行いました。



訪問看護も始まり、活動の幅が広がりました。



広島 法滝寺ご同行の皆様のご支援により、教育棟が完成。
更に医療教育へ力を入れられる環境ができ、その結果、
教育病院として政府から正式に認定されることになりました。



地域医療支援・保健教育プログラムでは予防教育が積極的に行われ、
病気になる前に防ぐことが経済的にも大きく影響することを
浸透させました。



2 度のデング熱大発生も
一致団結で乗り越えました。

想像もしない出来事をたくさん経験し、長くもあり短くもある14年間が過ぎました。そして、この度の正式な自立の式典の日を迎えました。



副院長のピエクトラ医師によるスピーチ

この自立を達成することができたのは、支援をしてくださったたくさんのサポーターの皆さんのお蔭であるということをスタッフ一人一人が感じていることだと思います。式典には各地から支援者の皆さんがいらしてくださいました。

日本からは、AHC が始まる前からご支援を継続してくださっている社会医療法人財団 池友会の皆さんをご招待し、賑やかに自立の喜びを分かち合うことができました。

池友会会长である蒲池真澄医師からは、自立達成に対する喜びとカンボジア人スタッフへの今後の期待についてスピーチをいただき、カンボジア人スタッフも身が引き締まる思いで聞き入っていました。

今後多くのサポーターの皆さんのご厚意に恥じぬよう、“日々精進”です！

アンコール小児病院が開院したのは、1999年1月のことでした。あっという間の14年間。山あり谷ありでここまできましたが、アンコール小児病院は、晴れてフレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーの手を離れ、自立した団体として新たな出発をすることになりました。カンボジア国内で自立した運営が可能になることは、開院当初から目指していた目標です。一昨年夏から少しずつ自立の準備を始め、「高い医療の質を維持し、明朗会計のシステム化を行い、“真心のこもった医療”を提供する」ための組織固めを行って、正式な“譲渡式”を迎えるました。カンボジア人スタッフの努力と成長が“自立”を現実にすることはできたのだと、実感します。出会ったころは新人ドクターとしてあたふたしていたピエクトラ医師も副院長となり、貫録のあるスピーチもこなせるようになった姿を見て、ウルウルです。



蒲池真澄医師によるスピーチ



フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー 創設者 井津建郎



キーが譲渡されました！



式典では、例年通り、10年勤続スタッフの表彰も行われました。毎年10年勤続スタッフが増え AHC の土台が更にしっかりとし、根を張ったものになっているという実感がします。これからは、この立派な土台から大木が成長していくことになるのですね。
毎年この表彰を見るたびに、「おどおどして赤ちゃんみたいだったのにな‥成長したな‥」と感慨の時となります。



ダンス、ダンス！

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーの創設者井津建郎が手に持っているのは“鍵”。これまでフレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーが持っていた運営の鍵を、自立と共にアンコール小児病院スタッフへ譲渡です。

自立後も“思いやりのある真心のこもった医療を提供する”という、これまでのミッションを引き継いでいくことへの誓いでもあります。式典に参加されていた方々が証人ですね。

式典の後は、ダンス、ダンス！！

白熱したダンス風景も恒例のことなのですが、今年はひときわ盛り上がっていました。大きな会場でしたが、狭く感じるほど。各国からの式典参列者の皆さんも最初は圧倒されましたが、カンボジア人スタッフから促され、一緒にダンス、ダンス！！

支援者の皆さんと現場スタッフが一体となり、この自立の式典を祝福できたことはとても嬉しいことです。

カンボジア人スタッフは、多くの皆さんのお蔭でここまで来られたということを実感し、これからもその感謝の気持ちを忘れずに毎日の仕事に全力で臨むことでしょう。

来年、再来年、そして、10年後がますます楽しみになりますね。



サテライトクリニック訪問



ラオスの保健局からコミュニティープロジェクトへ視察

AHC の自立＝フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーの新たな出発の時となります。フレンズが親とするならば AHC という子どもの自立の時を迎えたことになり、親は第2の人生を歩むことになります。AHC が開院して14年のこの経験は、大変貴重なものであると感じます。その貴重な経験を「世界のまだ見ぬ子どもたちへ使いたい」と決意を固めました。そして、東南アジア諸国の中でも特に医療面では遅れているラオスで、活動を開始することになりました。そして今回、ラオスルアンパバーン保健局のスタッフを、視察も兼ねて式典へご招待。コミュニティープロジェクトやサテライトクリニックを見ていいただき、フレンズが企画しているラオスでの活動のイメージを作っていただきました。「段々形が見えてきました。うん、うん…」と、身近に感じていただけたようです。そして、「AHC のような活動ができるかと思うとワクワクします」と、気持ちも盛り上がってきたようでした。

2005年から、この出来事でアンコール小児病院での状況をみなさんにお知らせしてまいりましたが、今回が AHC からは“最後の出来事”発信となりました。これを書きながら、「いろんなことがあったな…」と感慨の気持ちがいっぱいです。そして、皆様のこれまでのご支援に心より感謝いたします。

Friends Without A Border は今後もささやかながら AHC をバックアップし、新たなラオスでのプロジェクトを開始、展開していきます。こちらも全く想像つかないことがたくさん起きるのだと思います。

今後、この“出来事”は、引き続きフレンズの活動報告の場とさせていただきたいと思いますが、ラオスプロジェクトの進捗やその他のプロジェクトを中心に皆様へお送りすることを考えております。

今後も新しい Friends Without A Border をよろしくお願ひいたします。

Friends Without A Border 赤尾和美